

8-1 発音関係

1 発音記号

「発音記号」とは、辞書の見出し語のすぐ後に、たいてい [] (square brackets) とか / / (slashes) という記号の間に書かれている æ とか ə のような、単語の発音を示す記号のことで、正式には IPA (アイピーエー: International Phonetic Alphabet (国際音標文字) の頭文字) といいます。この IPA は専門書などで使われる場合はほぼ統一されているのですが、一般の学習書や辞書では、使われる文字がその本ごとに若干違う場合があります。たとえば、fire (火) という語の発音記号を調べてみると、

- ① 辞書 A : /fáɪə | fáɪə/ ② 辞書 B : /fáɪər/

となっています。まず、①と②でアルファベットの I (アイ) の字体が違うことに気づきましたか？ また、語末にある記号が①では /ə/ と書いてあるのに、②では /ər/ となっています。(☞ p.208) こうした記号は、その辞書のどこかに必ず説明(凡例)が載っているはずですから、読めない文字が出てきたらその都度確認してください。

たいていの発音記号はふつうのアルファベットと同じ文字を使っていますが、中には見慣れないものがありますね。それらをちょっと確認しておきましょう。

発音記号	記号の名前	発音	表す音
æ	ash	/æʃ/	アとエの中間の音
ə	schwa	/ʃwá:/	※詳細は下記
ə̃	hooked schwa	/hokt ʃwá:/	※詳細は下記
ɔ	open O		口を大きく開いた「オ」
ʌ	turned V		日本語の「ア」とほぼ同じ音
ɪŋ	eng	/éŋ/	
ʃ	esh	/éʃ/	
ɜ	ezh	/éʒ/	
ð	edh [eth]	/éð/	th の有声音(濁った音)
θ	theta	/θítə/	th の無声音
j	yod	/júd, jó:d/	日本語のヤ行の子音を表す
:	lengthening mark		※詳細は下記

この中で注意すべきものを少し説明をしておきましょう。

小文字の e が逆さまになった記号 ə は「シュワー」と呼ばれますが、この記号は決まった音を表しません。単語の綴り字の中で、この記号の該当するところにある文字を弱くあいまいにあまり口を開けずに発音した音、くらいに考えてください。(なのでこのシュワーの表す音を「曖昧母音」と呼ぶこともあります) たとえば、visit の発音記号は /vɪzət/ ですが、ə の文字に対応する綴りは i ですから、「イ」を弱くあいまいに発音すればいいのです。

以前、「ə の文字は『ア』を弱くあいまいに発音する」と勘違いしていると思われる人(日本人)がいました。その人は、possible /pósəbl/ を「ポッサブル」のように、また participate /pɑ́tɪsəpèit/ を「パーティサベイト」のように発音していました。どちらも ə に対応する位置にある綴り字は i ですから、日本語の「イ」を弱くあ

いまいに発音して「ボッシブル」「パーティスイペイト」のように、どちらかという「イ」に近い音で発音した方がいいのです。

もちろん例外もあります。today/tə'deɪ/ という語の /ə/ に対応する文字は o だから「トデイ」に近い音かという、そうではありません。この単語は元々 to day と2つの単語が1つになってできた語なので、to の部分は前置詞の to の発音を引き継いで、「トゥー」を弱く短くあいまいに発音して「トゥデイ」に近い発音で OK です。(tə'deɪ/ という発音記号を載せている辞書もあります)

それから上の表で ə の記号の1つ下に、ɚ という記号がありますね。これは日本語では「かぎ付きシュワー」と呼ばれています。この記号の右側のヒゲのような部分は元々小文字の r を表していて、ə の記号の右上に r の文字を足してできたものです。

たとえば、car という単語の米語の発音を調べると、辞書によって /kɑːr/ と書いてあるものと、/kɑɹː/ と書いてあるものがあります。もちろんどちらも同じ「カー」という音を表しているのですが、最初の書き方だと「カー」という音の後に、独立した r の文字が添えられているように見え、「カール」のように最後に子音の r があると誤解される可能性があります。もちろんこの r は主にアメリカ英語で聞かれるそり舌音(舌を後ろにそらして発音する音)を示し、前の a: の部分と一体化しているのであって、/ɑː/ と /r/ という2つの音からできているわけではありません。そこで、その r という発音記号を前の音と分けて書くのはマズイということで、ə という記号と r という記号を合体させた ɚ という記号を使って1つの音であることを表そうとしているわけです。でもこの記号、確かに見た目はちょっと専門的な感じがしますね。なにしろ、この ɚ を英和辞典の発音記号に採用したある出版社に、高校の先生から「おまえのところで出している英和辞典の発音記号の活字が汚れているぞ!」と指摘の電話がかかってきた、というウソのようなホントの話もあるくらいですから...

表のいちばん最後にある /ɪ/ は注意が必要です。日本語では「長

音符」と呼ばれていて、その字のとおり「長い音」を表すときに使います。ただし、この「長い」がくせものです。以下の2組の語を見てください。

live /lɪv/ (生きる) — leave /li:v/ (離れる)
pull /pʊl/ (引っ張る) — pool /pu:l/ (プール)

左側の短い /ɪ/ や /ʊ/ の音をそのまま長く伸ばしたら右側の /i:/ や /u:/ の音になると思ったら大間違いで、この2つは音色も音質もまったく違う全然別の音です。ただし、発音記号上は左側の /ɪ/ や /ʊ/ の音に /:/ がついているだけですから、そういう誤解を招きやすいのも事実です。そこで、誤解を防ぐ意味も含め、多くの辞書では、短い方の音にわざと /ɪ/ や /ʊ/ とは違う /ɪ/ とか /ʊ/ という記号を使って「別の音ですよ」ということを示そうとしています。

それから、上の表にはありませんが、g の文字の話もついでにしておきましょう。G の小文字には、g という文字と ɡ という文字の2種類があります。実は IPA では厳密には ɡ の方を使うことになっているそうです。ただ、一般書に載っている発音記号でこの2つの文字のどちらを使うのかは、出版社が好みで使い分けているようですので、gag が /gæɡ/ と書いてあったり /gæɡ/ と書いてあったりしますが、どちらも同じ、日本語の「ガ行」の子音を表しています。

さて、この2つの文字にも(区別するために)名前があります。

g の呼び名	ɡ の呼び名
single-storey (lowercase) g または opentail g	double-storey (lowercase) g または looptail g

single-storey は「1階建ての」、double-storey は「2階建ての」の意味ですが、視覚的で面白いネーミングですね。lowercase というのは「小文字(の)」という意味です。opentail は「しっぽの部分が開いている[閉じていない]」looptail は「ループ状になったしっ